

高松宮家伝来禁裏本「長恨歌」詩卷・「琵琶行」詩卷について

A Study of the Collections of Poems “Chogonka” and “Biwa-ko” from the Takamatsunomiya Collection
SHIZUNAGA Takeshi

静永 健

はじめに

国立歴史民俗博物館が所蔵する高松宮家伝来禁裏本コレクション⁽¹⁾の中に唐の詩人白居易（七七二―八四六）の詩歌を筆写した卷子本がある。資料番号H-600-1144（未函7）『長恨歌』と、資料番号H-600-1616（未函13）『琵琶行并序』である。⁽²⁾伝承による筆写者は室町初期の尊円親王（一二九八―一三五六）とされるが、前者「長恨歌」詩卷はもはや親王直筆の原本ではなく江戸中期の模写本であり、後者「琵琶行」詩卷のみがかりうじて尊円親王自筆本であろうとされる。本稿は、この二軸の詩卷の本文を紹介するものであるが、その意図するところは、後の章に述べるように、白居易『白氏文集』がいったい何時日本に伝来し、それが日本において如何に保存されていたかを紹介することにある。かつ、この一見煩瑣な本文研究が、天皇家を頂点とする平安朝以来の学知の伝承という経路を極めて具体的に明らかにするものであることを述べたい。

一、尊円親王と『白氏文集』

尊円親王は第九十二代伏見天皇の第六皇子。南北朝の動乱期にあつて、皇位に就くことは無かったが、青蓮院門跡や天台座主また四天王寺別当をも歴任し、また特に世尊寺流の書法を受け継ぎ、やがて尊円流または青蓮院流と呼ばれる書風を創始した人物として知られている。すなわち江戸時代において公文書の正式な書法である御家流の祖として尊崇された人物である。

尊円親王の著作とされるものに『入木抄』がある。⁽³⁾御家流書道の始祖の書論として古来重要視されてきたものであるが、その中で尊円親王は書道の手本として「消息（書簡文）」を用いることの不当を説き、白居易『白氏文集』など本格的な漢籍を筆写した古賢の臨書を以て学ぶべきであることを主張している（その第十四条「当世多く消息を手本とする、然るべからざる事」）。すなわち「上古の三賢」と称される平安三蹟（小野道風・藤原佐理・藤原行成）の手本として伝えられている白居易の詩卷等

を指して言ったものである。確かに今日も小野道風筆として『玉泉帖』（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）や『三体白氏詩卷』（正木美術館所蔵、国宝）、藤原行成筆として『白楽天詩卷』（東京国立博物館所蔵、国宝）や『後嵯峨本白氏文集』（正木美術館所蔵、国宝）が現存しており、藤原佐理筆としても「絹地切」および「綾地切」と称される『白氏文集』の古筆切断簡が全国各地に残されている。⁽⁴⁾

白居易の名作「長恨歌」と「琵琶行」とについて、三蹟直筆と称される墨蹟資料は現在のところ発見されていないが、⁽⁵⁾この尊円親王による臨書は、おそらくその当時に三蹟のものとしてされる平安以来の古筆詩卷が存在し、それを尊円親王がみずから若き皇族たちの手本として臨模し書き与えたものであろう。この二巻の墨蹟が高松宮家伝来コレクションに含まれる所以である。

筆者のこの推測は、一にかかつて、この詩卷二軸の本文および作品の構成（序文の有無）を根拠としている。この歴博所蔵資料は、現在中国で一般に通行している白居易『白氏文集』の本文とは著しく異なり、金沢文庫本などの我が国に伝来した貴重な古写本の本文にほぼ一致するからである。つまりこの詩卷は平安初期（九世紀）に我が国に伝えられた原作者白居易の最もオリジナルなものに近い本文なのである。⁽⁶⁾更にその中でも特に重要であるのが白居易「長恨歌」に付された「長恨歌序」である。この一文については、現在中国で見ることができる『白氏文集』およびそれを書き写した資料等に一切残されていないことから、長らくその存在が否定され、我が国の某人による偽作であろうかとの推測の下に処理され、等閑に付されてきた。⁽⁷⁾しかし近年、広島大学の陳獅准教授による日本各地の旧鈔本諸本の丹念な調査に基づいて、この「長恨歌序」が紛れもなく白居易本人の作であるべきことが証明された。⁽⁸⁾陳氏の論証の段階ではまだこの歴博所蔵の尊円親王詩卷が加えられていなかったが、ここに本共同研究の成果として、本詩卷全文の翻字を掲載し、そ

の説を補強したい。本詩卷は、日本のみならず、発源地中国においても極めて高い価値を有するものである。

二、尊円親王筆「長恨歌」詩卷の文献価値

歴博所蔵「長恨歌」詩卷の翻字は次の通りである（句読点は筆者による）。現存の第二紙から第三紙に至る間におよそ三一二字の欠落がある。本詩卷は、一時期その卷子本の状態を解かれ、バラバラの断片となっていた可能性がある。また本詩卷は、尊円親王の自筆ではなく、その大部分が後人による転写本であり、一部には「双鉤填墨」による精巧な謄写部分も見られる。しかし、その「長恨歌」の本文、および「長恨歌序」の存在によつて、この詩卷が尊円親王の真蹟を忠実に写し取ったものであることは勿論のこと、平安初期より我が国に伝えられてきた「白居易のオリジナルな本文」を保存するものであることが証明されるのである。

長恨歌傳

前進士陳鴻撰

開元中、泰階平、四海無事。玄宗在位歲久、勸于盱食霄衣。政無小大、始委於右丞相。稍深居遊宴、以聲色自娛。先是元獻皇后武淑妃

（以上第一紙）

皆有寵、相次即世。宮中雖有良家子千萬數、無可悅目者、上心忽々不樂。時每歲十月、駕幸華

清宮。内外命婦、焜耀景
從、浴日餘波、賜以湯沐。春
風靈液、澹蕩其間。上心油
然悅、若有遇顧、左右前
後、粉色如土。詔高力士潛
搜外宮、得弘農楊玄琰女

(以上第二紙)

【次の一段、歷博本欠。いま金沢文庫本等によつて補う。】

于於壽邸。既笄矣。鬢髮膩理、
纖縷中度、舉止閑冶、如漢武帝
李夫人。別疏溫泉、詔賜澡瑩。
既出水、體弱力微、若不任羅綺、
光彩煥發、轉動照人。上甚悅。
進見之日、奏霓裳羽衣曲以導之。
定情之夕、授金釵鈿合以固之。
又命戴步搖、垂金璫。明年冊爲
貴妃。半后服用、絲是治其容、
敏其詞、婉變万態、以中上意。
上益嬖焉。時省風九州、泥金五
岳、驪山雪夜、上陽春朝、與上
行同輦、止同室、宴專席、寢專
房。雖有三夫人九嬪廿七世婦
八十一御妻、暨後宮才人、樂府
妓女、使天子無顧眄意。自是六
宮無復進幸者。非徒殊艷尤態、
獨能致是、蓋才智明慧、善巧便

佞、先意希旨、有不可形容者。
叔父昆弟、皆列在清貫、爵爲通
侯。姊妹封國夫人、富埒王室、
車服邸第、與大長公主侔、而恩
澤勢力、則又過之。出入禁門、
不問名姓、京師長吏、爲之側目。
故當時謠詠有云、生女勿悲酸、
生男勿喜歡。又曰、男不封侯、
女作妃、君看、女却爲門楣。

其天下心、羨慕如此。天寶
末、兄國忠盜丞相位、愚弄國
柄。及安祿山引兵嚮關、以討
楊氏爲辭。潼關不守、翠花
南幸。出咸陽、道次馬嵬亭。
六軍徘徊、持戟不進。從官
郎吏、伏上馬前、請誅錯
以謝天下怨。國忠奉鬻纓
盤水、死於道周。左右之意未
快。上問之、當時敢亦言者、請

(以上第三紙)

以貴妃塞天下之怒。上知不
免、而不忍見其死、反袂掩面、
使牽而去。蒼黃展轉、竟就
絕於尺組之下。既而玄宗狩成
都、肅宗受禪靈武。明年、大

兇歸元、大駕還都。尊玄宗為太上皇、就養南宮。自南宮遷于西內。時移事去、樂盡悲來。每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落。梨園弟子、玉琯發音、聞霓裳羽

(以上第四紙)

衣一聲、則天顏不怡、左右獻歎。三載一意、其念不衰。

(以上第五紙)

求之夢魂、杳不能得。適有道士自蜀來、知皇心念楊妃如是。自言有李少君之術。玄宗大喜、命致其神、方士乃竭其術以索之、不至。又能遊神馭氣、出天界、沒地府以求之、又不見。又旁求四虛上下、東極絕天海、跨蓬壺、見最高仙山。上多樓闕、西廂下有洞戶、東嚮闔

(以上第六紙)

其門、署曰玉妃大真院。方士抽簪叩扉、有雙鬟童女、出應門。方士造次未及言、而雙鬟復入。俄有碧衣侍女又至、詰其所從來。方士因稱唐天子使者、且致其命。碧

衣云、玉妃方寢、請少待之。于時雲海沈々、洞天日晚。瓊戶重闔、悄然無聲。方士屏息斂足、拱手立于門

(以上第七紙)

下。久之、而碧衣延入。且曰、玉妃出。見一人冠金蓮、被紫綃、佩紅玉、曳鳳舄、左右侍者七八人。揖方士、問皇帝安否、次問天寶十四載已還事。言訖憫默。指碧衣女、取金釵鈿合、各折其半、授使者曰、為我謝太上皇、謹獻是物、尋舊

(以上第八紙)

好也。方士受辭与信將行、色有不足。玉妃固徵其意、復前跪致詞、請當時一事、不聞于他人者、驗於太上皇。不然、恐鈿合金釵、負新垣平之詐也。

(以上第九紙)

玉妃茫然退立、若有所思、徐而言曰、昔天寶十載、侍輦避暑驪山宮。秋七月七日、牽牛織女相見之夕、秦人風俗、是夜張錦繡、陳飲食、樹瓜華、焚香于庭、号為乞巧、宮掖間尤尚之。

時夜殆半、休侍衛於東西
廂、獨侍上。々憑肩而立、因仰

(以上第十紙)

天感牛女事、密相誓心。
願世々為夫婦。言畢、執
手各嗚咽。此獨君王知之
耳。因自悲曰、由此一念、
又不得居此、復墮下界、且
結後緣。或為天子、或為
人、決再相見、好合如
舊。因之言太上皇

(以上第十一紙)

亦不久人間、幸惟
自安、無自苦耳。使
者還、奏太上皇。々心
震悼、日々不豫。其年夏

(以上第十二紙)

四月、南宮晏駕。元和
元年冬十二月二日、太
原白樂天、自校書郎
尉于盤屋。鴻与瑯琊王
質夫、家于是邑。暇日
相携遊仙遊寺、話及
此事、相与感歎。質

(以上第十三紙)

夫拳酒於樂天前曰、
夫希代之事、非遇

出世之才潤色之、則
与時銷没、不聞于
世。樂天深於詩、多於
情者也。試為歌之如

(以上第十四紙)

何。樂天因為長恨
哥。意者不但感其
事、亦欲懲尤物。窒
亂階、垂於將來也。
歌既成、使鴻傳焉。
世所不聞者、予

(以上第十五紙)

非開元遺民、不得知。
世所知者、有玄宗
本紀在、今但傳長
恨歌云爾。

長恨歌
并序

長恨者、楊貴妃也。既瘞
於馬嵬。玄宗却復宮闕、
思悼之至、令方士求致

(以上第十六紙)

其魂魄、昇天入地、求之
不得。乃於蓬萊山仙
宮、忽見素貌、慘然流
淚、謂使者曰、我本上
界諸仙、先与玄宗有

恩愛之故、謫居於下

世、得為夫妻。既死之

後、復恩愛已絕、今汝

來求我、恩愛又生。不久

却於人世、得為配偶、

（以上第十七紙）

以此為長恨耳。使者曰、

將天子使我至此、既得

相見、願得平生所翫之物、

以明不謬。乃授鈿合一扇

金釵一盤与之。曰、將此為驗。

使者曰、此當用之物、不足

為信。曾与玄宗平生有何

密契、願得以聞。答曰、七月七

日夜、長生殿私語時、曾

復記念否。使者還。因以鈿

合金釵奏御。玄宗笑曰、此世

（以上第十八紙）

所有也。豈得相怡。使者乃因

以貴妃密契以聞。玄宗慟

（以上第十九紙）

絕良久。謂使者曰、乃不謬矣。

今世人猶言玄宗与貴妃處、

世間為夫妻之至矣。歌曰、

漢皇重色思傾國、

御寓多年求不得。

楊家有女初長成、

養在深窓人未識。

天生麗質難自弃、

一朝選在君王側。

迴眸一笑百媚生、

（以上第二十紙）

六宮粉黛無顏色。

春寒賜浴華清池、

溫泉水滑洗凝脂。

侍兒扶起媚無力、

始是新承恩澤時。

雲鬢華顏金步搖、

芙蓉帳暖度春霄。

春霄苦短日高起、從

此君王不早朝。

承歡侍寢無閑暇、

春從春遊夜專夜。

（以上第二十一紙）

漢宮佳麗三千人、

三千寵愛在一身。

金屋粧成媚待夜、

玉樓宴罷醉和春。

姊妹兄弟皆列玉、

可憐光彩生門戶。

遂令天下父母心、

不重生男重生女。

驪山高處入青雲、

（以上第二十二紙）

仙樂風飄處處聞。
緩歌慢舞凝絲竹、
盡日君王看不足。
漁陽鞞鼓動地來、
驚破霓裳羽衣曲。
九重城闕煙塵生、
千乘萬騎西南行。
翠花搖々行復止、
西出都門百餘里。

(以上第二十三紙)

六軍不發無奈何、
宛轉蛾眉馬前死。
華鈿委地無人收、
翠翹金釵玉搔頭。
君王掩眼救不得、
迴看淚血相和流。
黃埃散漫風蕭索、
雲棧縈迴登劍閣。
蛾眉山上少行人、

(以上第二十四紙)

旌旗無光日色薄。
蜀江水碧蜀山青、
聖主朝々暮々情。
行宮見月傷心色、
夜雨聞猿斷腸聲。
天旋日轉迴龍馭、
到此躊躇不能去。

馬嵬堤下泥土中、
不見玉顏空死處。

(以上第二十五紙)

君王相顧盡霑衣、
東望都門信馬歸。
歸來池苑皆依舊、
太液芙蓉未央柳。
芙蓉如面柳如眉、
對此如何不淚垂。
春風桃李花開日、
秋露梧桐葉落時。
西宮南內多秋草、

(以上第二十六紙)

落葉滿階不紅掃。
梨園弟子白髮新、
椒房阿監青蛾老。
夕殿螢飛思悄然、
秋燈挑盡未能眠。
遲々鍾漏初長夜、
耿耿星河欲曙天。
鴛鴦瓦冷霜華重、
舊枕故衾誰与共。

(以上第二十七紙)

悠悠生死別經年、
魂魄不曾來入夢。
臨邛方士鴻都客、
能以精誠致魂魄。

為感君王展轉思、
遂教方士慫慂覓。
排空馭氣奔如電、
昇天入地求之遍。
上窮碧落下黃泉、

(以上第二十八紙)

兩處茫茫皆不見。
忽聞海上有仙山、
山在虛無縹渺間。
樓殿玲瓏五雲起、
其上綽約多仙子。
中有一人名玉妃、
雪膚華貌參差是。
金闕西廂叩玉扃、

(以上第二十九紙)

轉教小玉報雙環。
聞導漢家天子使、
九華帳裏夢魂驚。
攬衣推枕起徘徊、
珠箔銀屏遞迤開。
雲鬢半亂新睡覺、
花冠不整下堂來。
風吹仙袂飄飄舉、
猶似霓裳羽衣舞。
玉容寂寞淚瀾干、
梨花一枝春帶雨。

(以上第三十紙)

含情凝涕謝君王、
一別音容兩渺茫。
昭陽殿裏恩愛歇、
蓬萊宮中月日長。
迴頭下視人寰處、

(以上第三十一紙)

不見長安見塵霧。
空持舊物表深情、
鈿合金釵寄將去。
釵留一鈿合一扇、

(以上第三十二紙)

釵擘黃金合分鈿。
但教心似金鈿堅、
天上人間再相見。
天上人間再相見。
臨別慇懃重寄詞、
々中有誓兩心知。
七月七日長生殿、
夜半無人私語時。
在天願作比翼鳥、

(以上第三十三紙)

在地願為連理枝。
天長地久有時盡、
此恨綿々無絕期。

長恨哥

大乘院二品大王
筆跡也

(以上第三十四紙)

以上が「長恨歌」詩巻の全文である。

白居易の詩歌は、時代によってその本文そのものが大きく変動する。それはあたかも作品の作者がその死後も自らの本文に推敲を加え続けているかのように変転極まりなく、またそのいずれを是とするかの判断にも難しい問題が多々ある。しかしその最大の理由は、中国宋代における印刷技術（木版印刷）の発明と普及とによるものと考えてよい。

これを簡略に説明しよう。

白居易が生きた唐代、この頃ははまだ大部の書籍の印刷・出版の技術は開発されていなかった。この当時の詩歌は一枚一枚紙墨によって書き取られる写本でしかその伝播の方法はなかったのである。しかし、この時代には、いわゆる遣唐使たちの活躍により、唐土から多くの典籍が我が国に次々とたらされた。この頃の写本、およびこの頃の写本にもとづく転写本を唐鈔本もしくは旧鈔本と称する。いわゆる「金沢文庫本」「白氏文集」もこれに含まれる。

やがて宋代（特に南宋期）以降には木版印刷の技法が普及し、多くの書籍が「出版」されるようになる。このとき、その工程の重要な作業として諸本の校勘が行われる。伝承された幾つかの写本および先行する印刷本が取り揃えられ、編集者（校訂者）によって至当と思われる本文が選出されることになる。しかし、その文字には当然ながら未だいずれが正しいものか判断し難いものも多数存在した。また校訂者の判断ミスや、次の雕版段階での刻字ミス（写植ミス）も存在した。従って、唐代伝来の鈔本（写本）と宋代以降の印刷本との間には、多くの、しかも著しい文字の異同が生じる結果となったのである⁽⁹⁾。

例えば、先の「長恨歌」本文のうち、その第二十七紙部分における一段を挙げよう。

夕殿螢飛思悄然 夕殿に螢飛んで 思ひ悄然、

秋燈挑盡未能眠 秋燈 挑^かげ尽くして未だ眠る能はず。
 遲々鍾漏初長夜 遅々たる鐘漏 初めて長き夜、
 耿耿星河欲曙天 耿耿たる星河 曙^あけんと欲する天。
 鴛鴦瓦冷霜華重 鴛鴦の瓦は冷たくして 霜華^{しげ}重く、
 舊枕故衾誰与共 旧^{ふる}き枕 故^{ふる}き衾 誰と与^{とも}共にせん。

（白居易「長恨歌」第六十七句～第七十二句）

この六句は現在の通行本『白氏文集』（南宋紹興年間刊本⁽¹⁰⁾）の同一部分では次のように異なっている（筆者による傍点部に注目されたい）。

夕殿螢飛思悄然 夕殿に螢飛んで 思ひ悄然、
 孤燈挑盡未成眠 孤燈 挑^かげ尽くして未だ眠りを成さず。
 遲遲鍾鼓初長夜 遅々たる鐘鼓 初めて長き夜、
 耿耿星河欲曙天 耿耿たる星河 曙^あけんと欲する天。
 鴛鴦瓦冷霜華重 鴛鴦の瓦は冷たくして 霜華^{しげ}重く、
 翡翠衾寒誰與共 翡翠^{ひすい}の衾寒くして 誰と与^{とも}共にせん。

中国における版本（宋代以降の印刷本）の権威は絶大である。よって現在もなお白居易の「長恨歌」として一般に読まれている本文は後者の印刷本によるもの（すなわち翡翠衾寒…に作る本文）が定本と目されているのである。

しかし我が国においては宋版が舶来した鎌倉期以降もなお旧鈔本の本文によって「長恨歌」が読まれ続けた。寛喜三年（一二三一）の奥書を有する金沢文庫本『白氏文集』第十二卷⁽¹¹⁾に見える「長恨歌」の本文は、この尊円親王本とほぼ同一の本文である（第七十一句の「霜華」を「霜花」とするのみ。この「華」字と「花」字の書き換えは古典籍においては〈異体字〉の関係にあり、本文異同には当たらない）。

夕殿螢飛思悄然 夕殿に螢飛んで 思ひ悄然、
秋燈挑盡未能眠 秋燈 挑^{しか}げ尽くして未だ眠る能はず。
遅々鍾漏初長夜 遅々たる鐘漏 初めて長き夜、
耿耿星河欲曙天 耿耿たる星河 曙^あけんと欲する天。
鴛鴦瓦冷霜花重 鴛鴦の瓦は冷たくして 霜花重く、
舊枕故衾誰与共 旧き枕 故き衾 誰と与共にせん。

我が国の知識人が、宋元以降の新渡の印刷本に拠らず、なおも旧鈔本によって「長恨歌」を読んでいたのには大きな理由がある。それは舶来の印刷本の数量（部数）が少なく、いまだ貴重であったことにも拠るが、更には我が国十一世紀以来の典籍である『和漢朗詠集』や『源氏物語』に右の詩句がそのまま引用されており、中国刊本の本文に誤りがあることが容易に気づかれていたのである。

ところで、この尊円親王の「長恨歌」詩巻は、金沢文庫本（寛喜三年写本）に直接基づいたものでもない。南北朝期の京都にはなおこれよりも更に古い詩巻が伝存していたものようである。

翻字第二十六紙部分の次の一句は、中国通行本本文および金沢文庫本文とも異なる文字が見える。

秋露梧桐葉落時 秋の露に 梧桐 葉落つる時

（白居易「長恨歌」第六十二句）

この句の「秋露」の二字は、通行本および金沢文庫本ともに「秋雨」とする。しかし藤原公任『和漢朗詠集』（巻下・恋）には確かに「秋露」としており、尊円親王の筆誤ではないことが確かめられる。

我が国には金沢文庫本『白氏文集』に基づいた本文より以前に、更に早い時期にもたらされた「長恨歌」詩巻が存在したと思われる。それは

もしかすると、白居易が「長恨歌」を発表した唐・元和元年（八〇六）当初のものであるかもしれない。ことほど左様に、この尊円親王詩巻と金沢文庫本との本文の相異は、今後九世紀の伝来漢籍の実態を解明する有力な手懸かりとなり得る可能性を有しているのである。

白居易の「長恨歌」は、その発表直後から都長安で爆発的に流行した。約十年後の唐・元和十年（八一五）の頃には、都の妓女が「白学士の長恨歌が唱える」ことを自慢に座敷代を吊り上げたり、宴席に招かれた白居易本人を取り巻いて、同座の人々が指さしあうこともあったという⁽¹³⁾。そこで、その「長恨歌発表当初の姿」としてこの尊円親王の詩巻を見た場合、まことに重要な一文がこの詩巻には残されている。現在の通行諸本には存在が確認されていない「長恨歌の序」である（右の翻字では第十六紙から第二十紙にかけての部分）。その文章の信憑性については、先に紹介した陳紳氏の論文を参照されたいが、私は今ここにその白居易自作（と思われる）文章の全文とその訓読を掲げておきたい。この尊円親王詩巻のみならず、多くの墨蹟資料がそうなのであるが、文中に往々にして明らかな誤写と見られる文字が散見される。中には、この序文の白居易自作説を否定する根拠の一つとなるほどに、中国文としては成り立ち得ないような文法的誤りを含むものも存在する⁽¹⁴⁾。しかしこれらについては伝存する他の「長恨歌序」の写本と校合し、ほぼ至当と思われる本文を抽出することが可能なのである⁽¹⁵⁾。

長恨歌 並びに序

長恨は、楊貴妃なり。既に馬嵬に瘞^{うづ}められ、玄宗 宮闕に却復せるに、思悼の至り、方士をして其の魂魄を求め致さしむ。天に昇り地に入りて、之を求むるも得ず。乃ち蓬萊山の仙宮に於いて、忽ち素貌を見る。

慘然として涙を流し、使者に謂ひて曰く、

「我は本と上界の諸仙、先に玄宗と恩愛有るが故に、下世に謫居せられ、夫妻と為るを得。既に死しての後、恩愛已に絶ゆるも、今汝来りて我を求むれば、恩愛又た生ず。久しからずして人世に却りて、配偶と為るを得ん。此れを以て長恨と為る耳。」と。

使者曰く、

「天子 我をして此に至らしめ、既に相見るを得たり。願はくは平生 翫ぶ所の物を得て、以て謬たざることを明かさん。」と。

乃ち鈿合一扇、金釵一股を授けて之に与へて曰く、

「此れを將つて験と為せ。」と。

使者曰く、

「此れ常用の物、信と為すに足らず。曾て至尊（『玄宗を指す』）と

平生 何の密契か有らん。願はくは以て聞こえん。」と。

答へて曰く、

「七月七日夜の長生殿、夜半人無く私語の時を曾て復た記念するや否や。」と。

使者還り、因りて鈿合金釵を以て御に奏す。

玄宗笑ひて曰く、

「此れ世に有る所なり。豈に相怡ぶを得んや。」と。

使者乃ち因りて貴妃の密契を以て聞す。玄宗慟絶すること良久し。

使者に謂ひて曰く、

「乃ち謬たず矣！」と。

今世の人猶ほ言へり、

「玄宗と貴妃とは、世間に処ける夫妻の至りと為さん矣！」と。

歌に曰く、……（以下「長恨歌」本文に続く）

この序文が後世の某人による偽作ではなく、白居易の実作であろうと推測できる最大の理由は、この序文の叙述が「長恨歌」本作の最終段（第

一〇一句、最終第一二〇句）の方士（使者）と仙女楊貴妃との遣り取りに集中していることが挙げられる。仙界に転生した楊貴妃が、玄宗への変わらぬ愛を証明するために、鈿合や金釵ではなく、七夕の夜の長生殿での密誓（愛の告白）を明かす場面こそが、白居易「長恨歌」の最も重要な核心部分であり、この序文はそれを間違いなく指し示しているのである。もし、これが原作者以外の人物の執筆であると仮定するならば、それは今日に伝わる陳鴻「長恨歌伝」がまさにそうであるように、楊貴妃の出生から入内、そして安史の乱による別離の顛末に至るまで、楊貴妃の一生涯が縷々事細かに述べられたであろう。よってこの序文がまさしく白居易の自作であることを確信するとともに、この臨模尊円親王詩巻が、その本文の伝承を古く平安初期の宮中にまで遡ることができるものであることを推断するものである。

また、この序文のもう一つの特徴として、方士と仙女楊貴妃との緊迫した会話の応酬が挙げられる。このような会話体であれば、一文の長さも短くなり、平安初期のいまだ中国文に習熟していない者であっても、比較的容易に文意をつかむことが可能である。平安初期、舶来したばかりの「長恨歌」には、やはりこのような序文があればこそ、多くの人々に読まれることが可能となったと言えるであろう。

三、尊円親王筆「琵琶行」詩巻の文献価値

「琵琶行」（原文は琵琶引とする）詩巻の本文は以下の通りである（これも句読点は筆者による）。本詩巻には途中に切断や補筆等の痕跡は見られない。よって、尊円親王の真筆がそのままに伝承されているものと思しい。

琵琶引 并序

元和十五年秋、予左遷九江郡

司馬。明年秋、送客至湓浦口、
聞舟船中夜彈琵琶者。聽

其音、錚錚然有京都聲。聞其人、

本是長安倡家女、嘗學琵琶

於穆曹二善才。年長色衰、委

身為賈人婦。遂命酒、使快彈

數曲。々罷憫默。自叙少年時歡

(以上第一紙)

樂事、今漂淪憔悴、轉徙於江湖

間。予出官二年、恬然自安、感斯人言、

是夕始覺有遷謫意。因為長

句歌以贈之、凡六百一十二言、命曰

琵琶引。

尋陽江頭夜送客、楓葉荻花

秋索々。主人下馬客在船、舉酒欲

飲無管絃。醉不成歡慘將別、々時

茫々江浸月。忽聞水上琵琶聲、

主人忘歸客不發。尋聲暗問彈

者誰、琵琶聲停欲語遲。移

船相近邀相見、添酒迴燈重開宴。

(以上第二紙)

千呼万喚始出來、猶抱琵琶半

遮面。轉軸撥絃兩三聲、未成曲

調先有情。絃々掩抑聲々思、似

訴平生不得意。低眉信手續々

彈、說盡心中無限事。輕攏慢

撚抹復挑、初為霓裳後綠腰。大

絃嘈々如急雨、小絃竊々如私語。嘈々

竊々雜錯彈、大珠小珠落玉盤。

間關鶯語花底滑、幽咽泉流水

下難。冰泉冷澀絃凝絕、々々不

通聲暫歇。別有幽愁暗恨生、

(以上第三紙)

此時無聲勝有聲。銀瓶乍破

水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴。曲終

收撥當心畫、四絃一聲如裂帛。

東船西船悄無言、唯見江心秋

月白。沈吟放撥插絃中、整頓

衣裳起斂容。自言本是京城女、

家在蝦蟆陵下住。十三学得琵

琶成、名屬教坊第一部。曲罷曾

教善才伏、粧成每被秋娘妬。

五陵年少爭纏頭、一曲紅綃不

知數。鈿頭雲篋擊節碎、血色

羅裙飄酒污。今年歡笑復明年、

(以上第四紙)

秋月春風等閑度。弟走從軍阿

姨死、暮去朝來顏色故。門前零

落鞍馬稀、老大嫁作商人婦。商

人重利輕離別、前月浮梁買

茶去。々來江口守空船、遶船月明

江水寒。夜深忽夢少年事、夢啼

粧淚紅欄干。我聞琵琶已歎息、

又聞此語重唧唧。同是天涯淪

落人、相悲何必曾相識。我従去
年辞帝京、謫居病臥尋陽
城。尋陽小處無音樂、終歲不
聞絲竹聲。住近湓江地低

(以上第五紙)

濕、黃蘆苦竹繞宅生。其
間旦暮聞何物、杜鵑啼哭猿
哀鳴。春江花朝秋月夜、往々取
酒還獨傾。豈無山歌与村笛、歐啞
嘲晰難為聽。今夜聞君琵琶語、
如聽仙樂耳暫明。莫辞更坐彈一
曲、為君續作琵琶引。感我此言
良久立、却坐促絃々轉急。悽々不
似向前聲、滿坐重聞皆掩
泣。就中泣下誰最多、江
州司馬青衫濕。

(以上第六紙)

依加久之所望所染

御筆也

(以上第七紙)

この詩巻の本文もまた先の「長恨歌」と同じく中国での通行本本文とは異なり、日本に伝来する金沢文庫本『白氏文集』および国立公文書館内閣文庫所蔵の『管見抄』に一致する。例えばその序文冒頭の、

【尊円本】元和十五年秋、予 九江郡司馬に左遷せらる。明年秋……
【通行本】元和十年、予 九江郡司馬に左遷せらる。明年秋……

のように、その年数までもが大きく異なるのである。しかし、これも既に静永の拙稿に詳しく述べたように、この「元和十五年秋……」という架空の年月を記す本文こそが原作者白居易の創作意図を十分に明らかにするものである(皇帝の突然の崩御により、実際には元和十五年の秋はめぐってこなかった)。

高松宮コレクションが所蔵した白居易「長恨歌」「琵琶行」詩巻は、中国で現在も一般的に読まれている南宋以降の印刷本『白氏文集』の本文とは著しく異なり、それ以前の(おそらくは唐代の)旧鈔本にもとづいて筆写された詩巻である。それは、南北朝の動乱期にあっても我が国においてしっかりと守り伝えられてきた貴重な詩巻であり、また、三蹟の書風に則った御家流始祖の法帖でもあった。⁽¹⁹⁾ 今回の共同研究では、その日本書道史上の意義にまでは十分な考察が及ばなかったが、この本文・異同からも、この尊円親王筆写本が中世およびそれ以降においてにわかに書き起こされた墨蹟ではなく、その根源をたどると、平安初・中期の、我が国の書道史の草創期に淵源を持つものであり、また中国文学史においても、宋代の書籍印刷が開始される以前の極めて貴重な本文を保持するものであることが明らかになった。我が国における漢籍の保存は、天皇を頂点とする日本独自の権力構造の中で、中国とは全く異なる力学がはたらいて厳格に守られてきたのである。この二軸の詩巻は、今後也更にさまざまな分野からの研究が待たれる貴重な資料であると言える。

註

- (1) 高松宮家伝来禁裏本は、旧有栖川宮家に伝来した蔵書群の一部で、大正天皇の第三皇子宣仁親王が継承してきたもの。親王薨去の後、文化庁に譲渡され、現在は周知の通り当歴博に移管されているものである。有栖川宮家は、江戸初期、第一二二代霊元天皇の第十七皇子職仁親王（よりひとしんのう、一七一三～一七六九）がその第五代当主となつて以来、御家流書道の一流派である有栖川流を立て、近世の我が国の書道を牽引してきた。なお、歴博所蔵の高松宮家伝来禁裏本については当館の『中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究―高松宮家伝来禁裏本を中心として―』（研究調査報告1・2、二〇〇七年・二〇〇八年）を参照。
- (2) 当館資料目録8『高松宮家伝来禁裏本目録（分類目録編／奥書刊記集成・解説編）』（二〇〇九年）参照。「長恨歌」「琵琶行」とともに卷子本で、法量は「長恨歌」が三一・一×一四七七・〇、「琵琶行」が三二・八×三三五・七。
- (3) 日本思想大系23『古代中世芸術論』（岩波書店、一九七三年）所収。「入木抄」の校注と解説は赤井達郎氏。
- (4) 小松茂美『古筆学大成』第二十五卷（漢籍・仏書・其の外）に道風佐理行成三跡の「絹地切」「綾地切」等の断簡が集成されている（講談社、一九九三年）。また同氏『平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究』（墨書書房、一九六五年）も参照。
- (5) ただし小野道風筆を模刻したと称する江戸期の木版法帖「琵琶引」が伝わっている。神鷹徳治「書跡資料について」（『白居易研究講座』第六巻所収、勉誠出版、一九九五年）に図版が掲載されている。
- (6) 詳しくは静永健「日本・尊円親王筆『長恨歌』の本文について」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十九号、二〇一〇年）を参照されたい。
- (7) 近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院、一九八一年）等。
- (8) 陳獅「日蔵旧抄本『長恨歌序』真偽考―兼論『長恨歌』主題及其文本伝変」（中国・中華書局『域外漢籍研究集刊』第七輯、二〇一一年）。
- (9) 神鷹徳治「序論―旧鈔本と唐鈔本」（勉誠出版、アジア遊学140『旧鈔本の世界：漢籍受容のタイムカプセル』の序文、二〇一一年）によれば、神鷹氏はこの唐代の写本の本文と宋代の刊本の本文との間の差異を「断絶」という言葉で表現している。まことに然り。
- (10) 中国国家図書館所蔵南宋刊本『白氏長慶集』七十一巻。現在その影印は一九五五年文学古籍刊行社版、一九八一年台湾・藝文印書館版、そして中華再造善本シリーズ二〇〇三年北京図書館出版社版の三種がある。
- (11) 現在は大東急記念文庫所蔵。重要文化財。影印は一九八三年勉誠社『金沢文庫本白氏文集（一）』による。
- (12) 大江維時「千載佳句」（四時部・秋夜）および藤原公任『和漢朗詠集』（秋部・秋夜）に「遅々鐘漏初長夜、耿耿星河欲曙天」が引用される。また『源氏物語』（葵巻）に、死没した葵の上の手習い書きとして「ふるき枕ふるきふすま誰とともにか」と「霜のはなしけし（一説にしろし）」とを光源氏が見つける場面がある。また、平安末の慈円と藤原定家そして寂身の三人がおこなった『文集百首』の題に「遅々鐘漏初長夜、耿耿星河欲曙天」と「夕殿螢飛思悄然、秋燈挑尽未能眠」、さらに「旧枕古衾誰与共」が選ばれている。
- (13) 白居易「与元九書」（那波本『白氏文集』巻二十八所収）に見える挿話。
- (14) 最終段の「以、貴妃密契以聞」は、日本での漢文訓読の習慣によって誤って一字を増加したもの。おそらく「以貴妃密契聞」となるものであろう。
- (15) 主に以下の四種の本文を参照した。
 - ① ノートルダム清心女子大学図書館所蔵正宗敦夫文庫本「長恨歌」（ノートルダム清心女子大学古典叢書第三期2、福武書店、一九八一年）……文永五年（一二六八）写本
 - ② 早稲田大学図書館所蔵写本「長恨歌」（早大図書館古典籍総合データベースによるH P公開版による）……永享九年（一四三七）写本。
 - ③ 東京国立博物館所蔵写本「長恨歌」（日本名跡叢刊20、二玄社、一九七八年）……慶長十九年（一六一四）松花堂昭乗筆。
 - ④ 国立国会図書館所蔵江戸木版本「鰲頭歌行詩諺解」（神鷹徳治編、勉誠社文庫138、勉誠社、一九八八年）……貞享元年（一六八四）木版本。
- (16) 本稿は歴博の研究報告であることを考慮して、文学研究の論文のように煩瑣な本文異同の比較対照は省略する。これについては改めて文学研究のための論考として別稿を用意して発表したい。よって、以下にはその序文の訓読のみを挙げておく。
- (17) 平安初期に広く読まれたものとしては『論語』がまさしくそうであり、また司馬遷『史記』における幾つかの代表的な巻（五帝本紀や項羽本紀など）も短い会話の連続によって故事が展開してゆく。
- (18) 静永「唐詩推敲―唐詩研究のための四つの視点―」（研文出版、二〇一二年）冒頭口絵掲載の架蔵尊円親王筆「琵琶引」詩巻（貞和五年・一三三九写）図版、および同書所収「虚構の中の『琵琶引』」を参照。
- (19) 日本書道史においても、尊円親王の書は三蹟（とくに藤原行成）を祖と仰ぎ、その書風を継承するものと説明されているが、ここでは例えば行成の書風を伝えるとされる宮内庁三の丸尚蔵館蔵「粘葉本和漢朗詠集」に収録される白居易「長恨歌」の四句、すなわち、

イ、遅々鐘漏初長夜、耿耿星河欲曙天（巻上、秋夜）
ロ、行宮見月傷心色、夜雨聞猿斷腸聲（巻下、恋）

ハ・春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時（巻下、恋）

ニ・夕殿螢飛思悄然、秋燈挑盡未能眠（巻下、恋）

を今回の尊円親王「長恨歌」詩巻の当該部分と参照すると、イの「欲」字やロの「傷心色」三字と「聲（声）」字の書体、ハの「開」字と「葉」字のくずし、ニの「飛」字、「然」字、「燈」字の特徴的な字形に明らかな継承関係が見える。また近衛家陽明文庫所蔵の『和漢抄』（和漢朗詠集の下巻）におけるロ・ハ・ニ三句もこの特徴が一致する。尊円親王の書体が明確に平安時代以来の定型を踏襲するものであることがわかる。佐々木信綱監修『御物本倭漢朗詠集』（上下冊、付解説及釈文、七條書房、一九二七年）および『和漢抄行成卿真蹟』（博文堂、一九三五年）の各写真図版を参照。

（九州大学大学院人文科学研究院、

国立歴史民俗博物館共同研究代表者）

（二〇一四年七月二八日受付、二〇一四年二月一日審査終了）

長恨歌傳

前進士陣鴻撰

開元中泰階平四海無
事玄宗在位歲久勸
千旰食宵衣政無小大始
委於右丞相賴深居
遊宴以歡自娛先
是元就皇后武渼妃
皆有寵相次即世宮中

雖有良家子子可數也
可悅目者上心忽々不樂
時每歲十月駕幸華
清宮內外命婦煥耀京
從者日餘波賜以湯沐香
風靈液澹蕩其間上心油
然悅若有過顧左右前
後粉黛如去詔高力士潛
掖外宮得弘農楊玄瑛女

其天下心慕慕如此大愛
末兄國忠過丞相位愚弄國
柄及安祿山引兵陷國以討
楊氏為辭潼關不守翠花
南幸出咸陽道次馬嵬亭
六軍徘徊持戟不進從官
郎吏伏上馬前請誅錯
以謝天下怨國忠奉養纓
盤水死書道周左右之意未
快上曰當時教令言者請
以貴妃塞天下之怒上知不

免而不思見其死反被掩面
使牽而去若黃泉將竟就
絕書尺組之下既而玄宗將成
都肅宗更禪靈武明年大
元帥元大駕還都高玄宗為
太上皇就養南宮自南宮
遷于西內時移事主樂盡
此來每至春之日冬之夜
池蓮夏開文槐秋落梨園
弟子玉環鼓音聞霓裳羽
衣一聲則天顏不悅左右

歡歡三載一意其念不衰
戒之夢魂杳不能得適有
道士自蜀來知皇心念楊
妃如是自言有李少君之術
玄宗大喜命訪其神方
士乃竭其術以意之不聖又
能遊神馭氣出天家沒地
府以求之又不見又旁求四
處上下東極西三海跨蒼
臺見窮高仙山上多樓

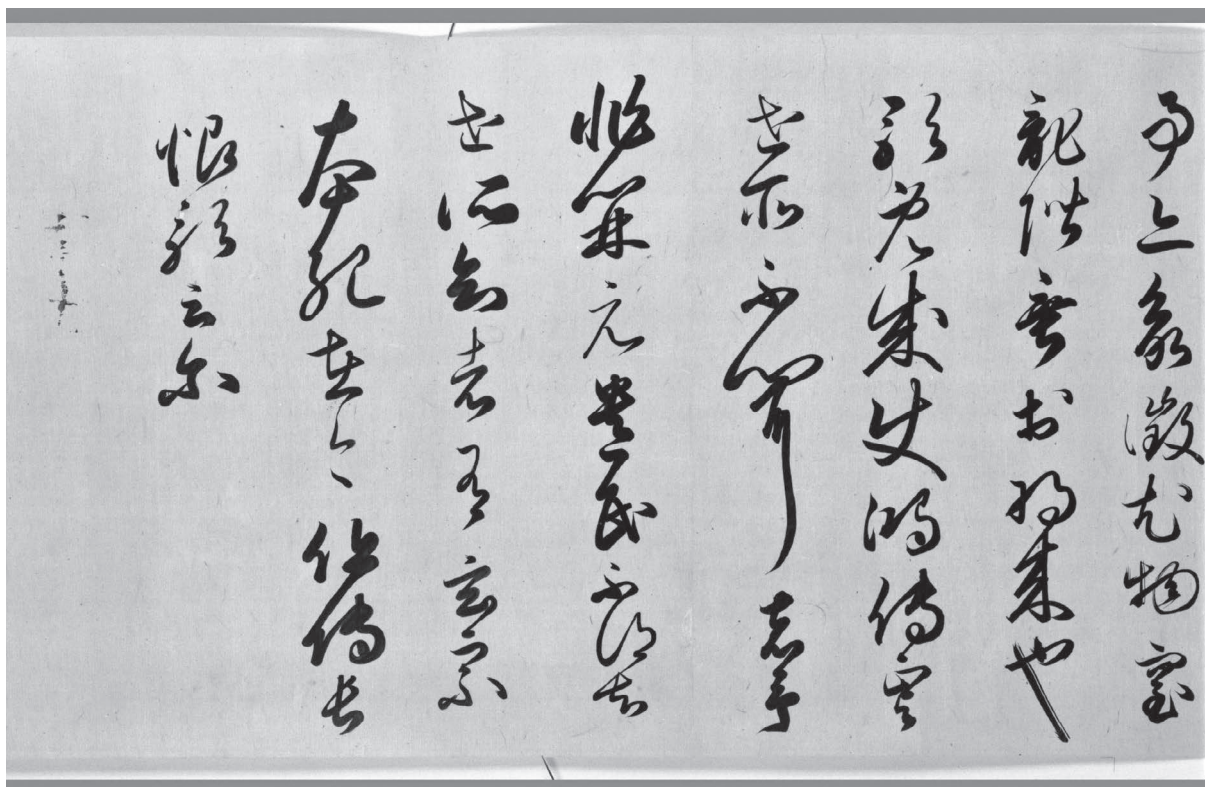
閣西廂下有洞戶東爲閣
其門署曰玉妃太真院方士
袖簪叩扉有雙鬟童女
出迎門方士進次未及言而
雙鬟遽入俄有碧衣侍女
又至詰其所從來方士因稱
唐天子使者且致其命碧
衣云玉妃方寢請少待之
時雲海沉沉洞天日晚
瓊戶重圓悄然無聲方

士屏息斂足拱手立千門
下久之而碧衣進入且曰
妃出見一人新金蓮被紫
綃珮玕玉或鳳留左右侍者
夫人指方士曰皇帝安否
次問大寶十四歲已事事否
訖惆悵指碧衣女取金釵鈿
合各折其半授使者曰為我
謝太上皇謹此是物為素
好也方士更拜曰信將何求
有不足玉妃固徵其意後亦

既被詞請當時一事不同
傳人者驗於太上皇不然恐
鈿合金釵履新垣平之詐也
玉妃茫然而立為王以恩徐
而言曰昔大寶十載侍妾
飛鳥渡山言秋七月方
幸中織女相見七夕泰
人風俗是教張錦繡陳
飲食樹作華焚香千庭
步為乞巧宮櫺間尤也

時與孫休侍衛書東面
 廂獨倚上須臾而立因仰
 天感生女事委相播心
 願世為夫婦言平執
 手各嗚咽以相別王即
 下因自燃曰此一念
 又亦得至此後語不覺且
 結語緣或為王女或為
 人必再相見必言如
 意因一書太后覽
 上亦人人男半佳

自為世日步下此
 去還書太后之旨心
 震悚曰不遂王意
 四月南宮高智元初
 元年冬十二月乙未
 原白不王自授事即
 尉之熱屋謂之瑯琊王
 質夫人安之是也
 相傳趙仙姑為漢及



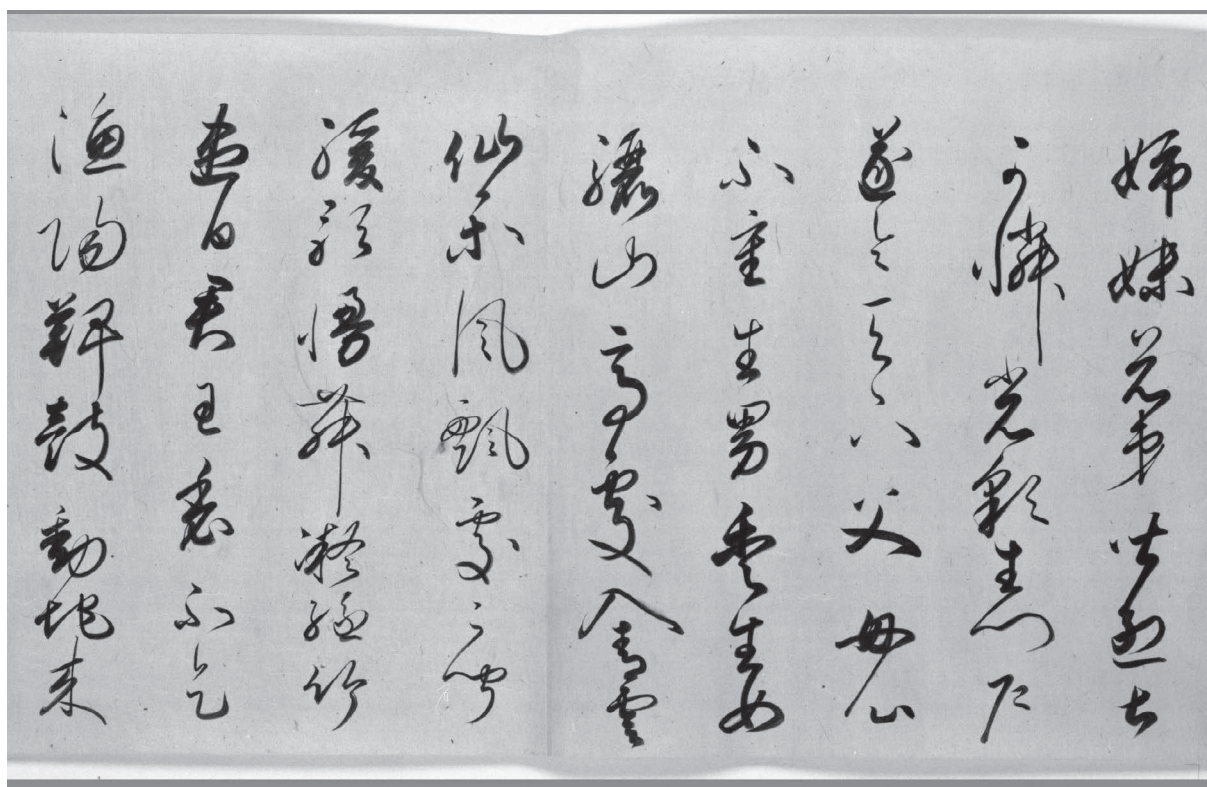
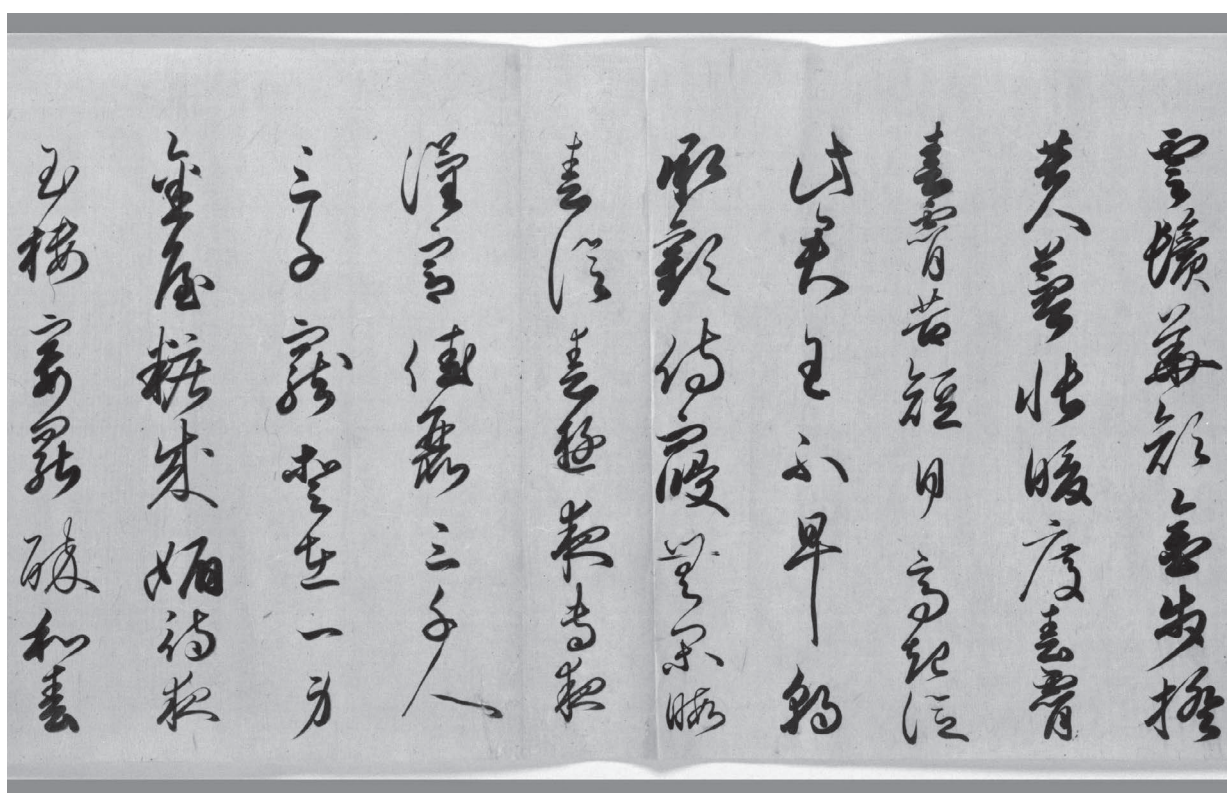
長恨歌 并序

長恨者楊貴妃也既殤
於馬嵬玄宗却復宮闕
思悼之至今方士求致
其魂魄昇天入地求之
不得乃於蓬萊山仙
宮忽見素衣慘然流
淚謂使者曰我本上
界諸仙先與玄宗有
恩愛之故謫居於下

世得為夫妻既死之
後復恩愛已絕今汝
來求我恩愛又生不久
却於人世得為配偶
以此為長恨耳使者曰
將天子使我至此既得
相見願得平生所歡之物
以明不謬乃授鈿合一扇
金釵一盤與之曰將此為驗
使者曰此當用之物不足
為信曾與玄宗平生有何

密契願得以聞答曰七月七
日夜長生殿私語時曾
復記念否使者還目以鈿
合金鈿似葵御玄宗笑曰此世
所有也豈得相怡使者乃因
以貴妃密契以聞玄宗慟
絕良久謂使者曰乃不謬矣
今世人猶言玄宗與貴妃處
世間為夫妻之至矣歌曰
漢皇重色思傾國
御寓多年救不得

楊家有女初長成
養在深宮人未識
天生麗質難自棄
一朝選在君王側
回眸一笑百媚生
六宮粉黛無顏色
春寒賜浴華清池
溫泉水滑洗凝脂
侍兒扶起嬌無力
始知承恩澤時

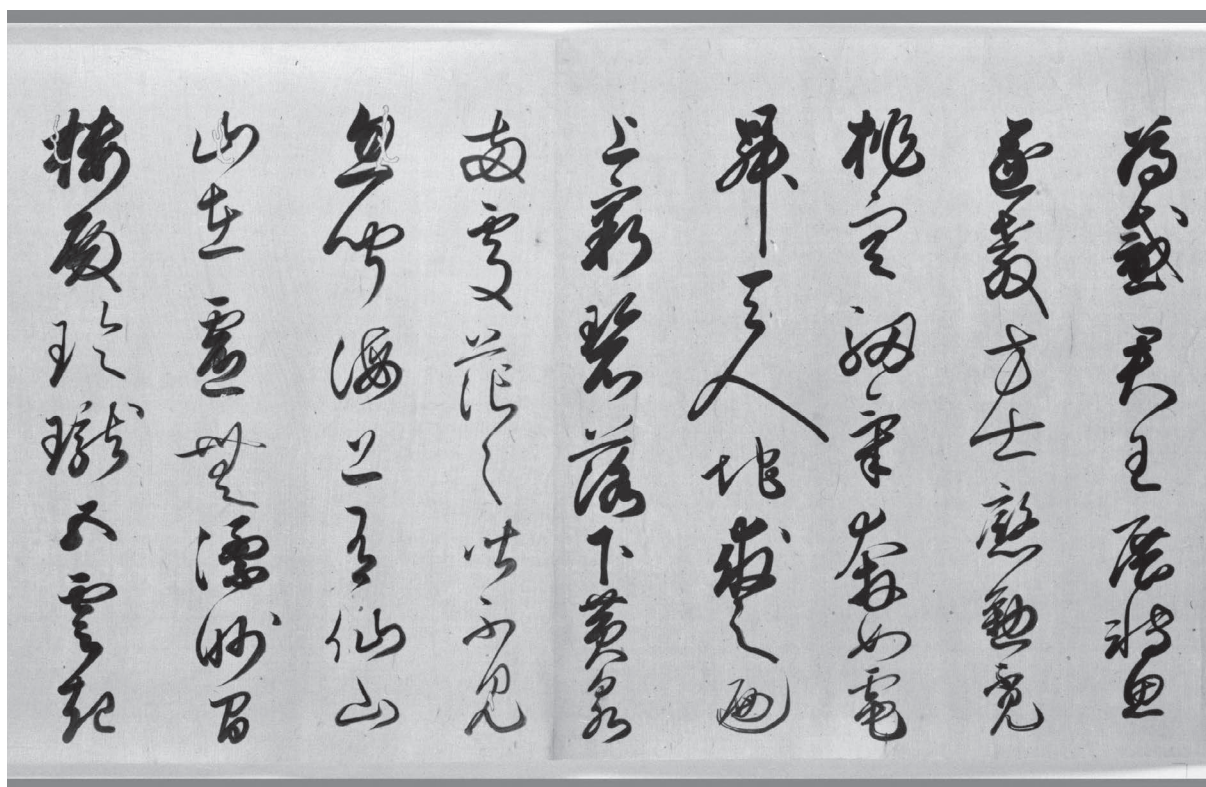
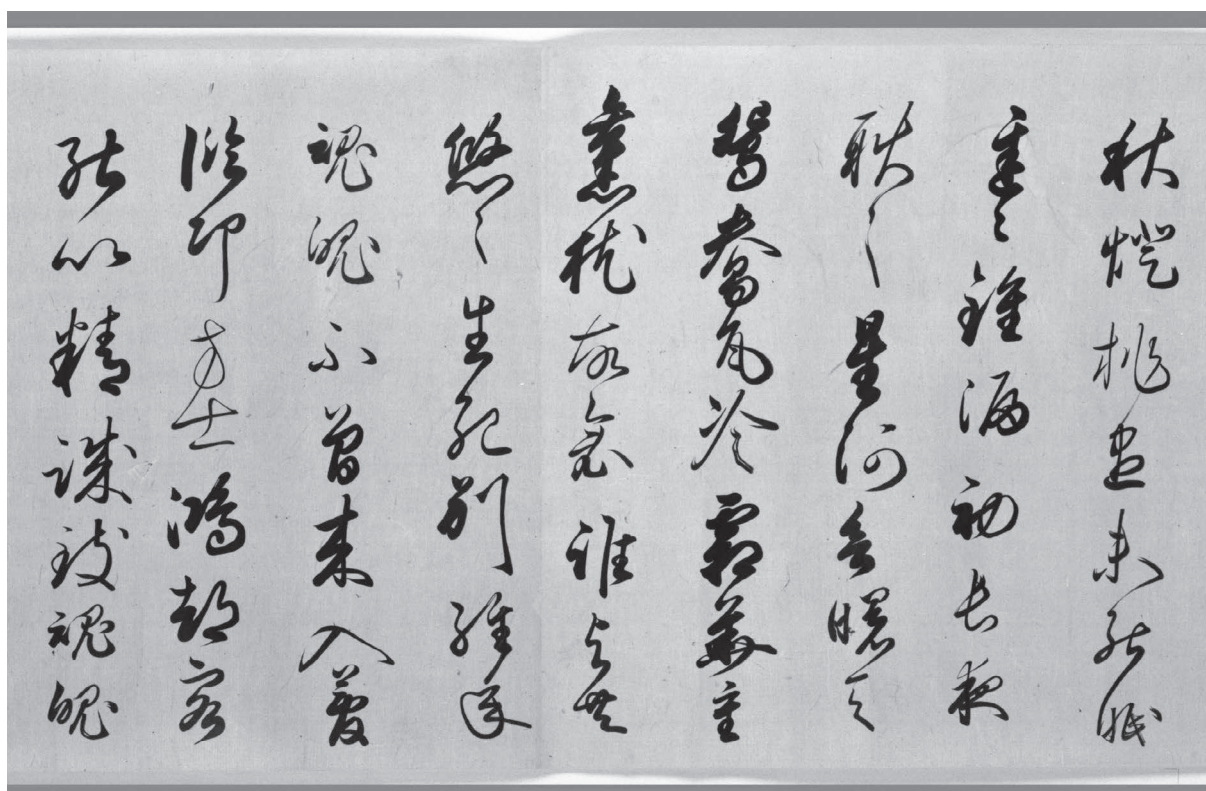


香波霓裳羽衣曲
九重城阙烟生
白素霓綺而重
翠花掩兮心
西都却下石
六军少及世
帝将城眉而
華細而地無人收
翠華坐城玉搔頭

天玉搔頭救之
早惠淚血相和
黃埃而落風蕭
雲機紫迴空細
城眉少少行人
陰陰其光日色
蜀江水碧蜀山
雲白即一華清
川言見月使

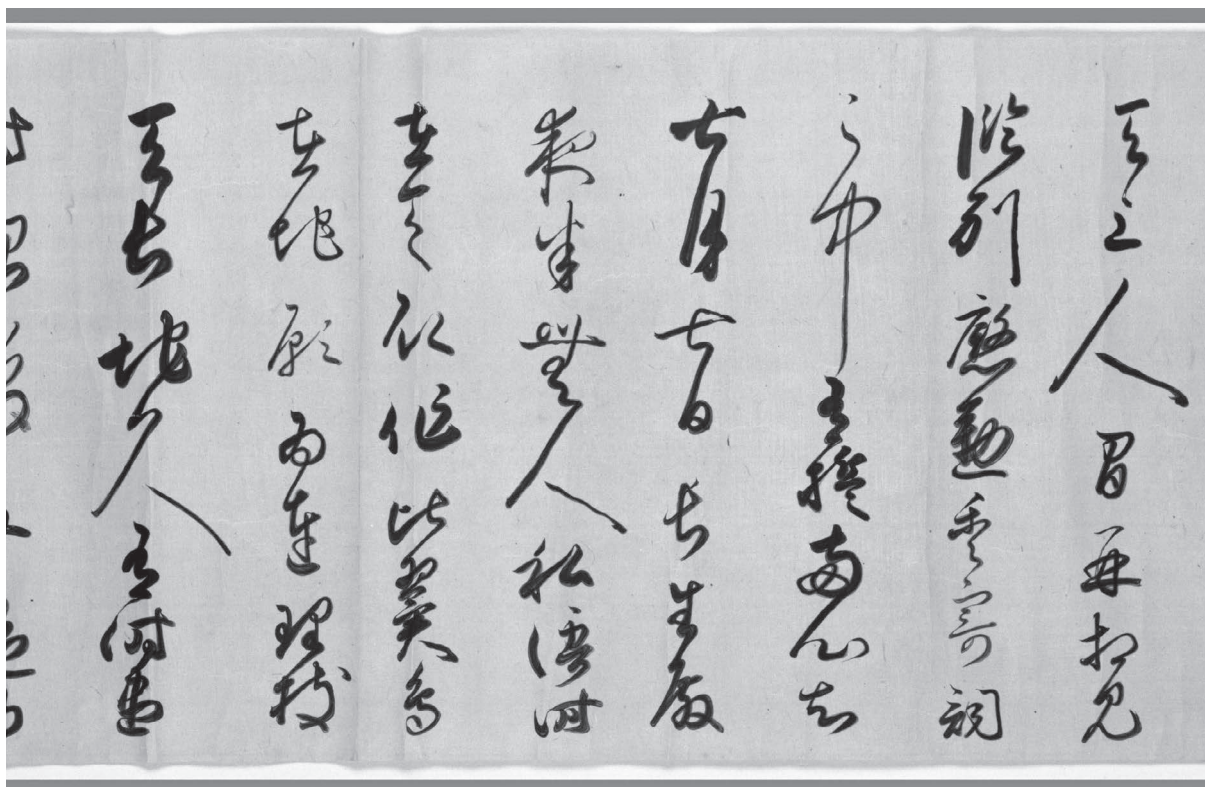
新面中 振師 猶存
王陵 轉回 新奴
外計 誘誘 之 姑且
馬寇 堤下 泥古中
不見 玉顏 之 死處
君王 相顧 盡 露哀
東望 都門 信馬行
歸來 池苑 皆 依舊
太液 芙蓉 未央 柳

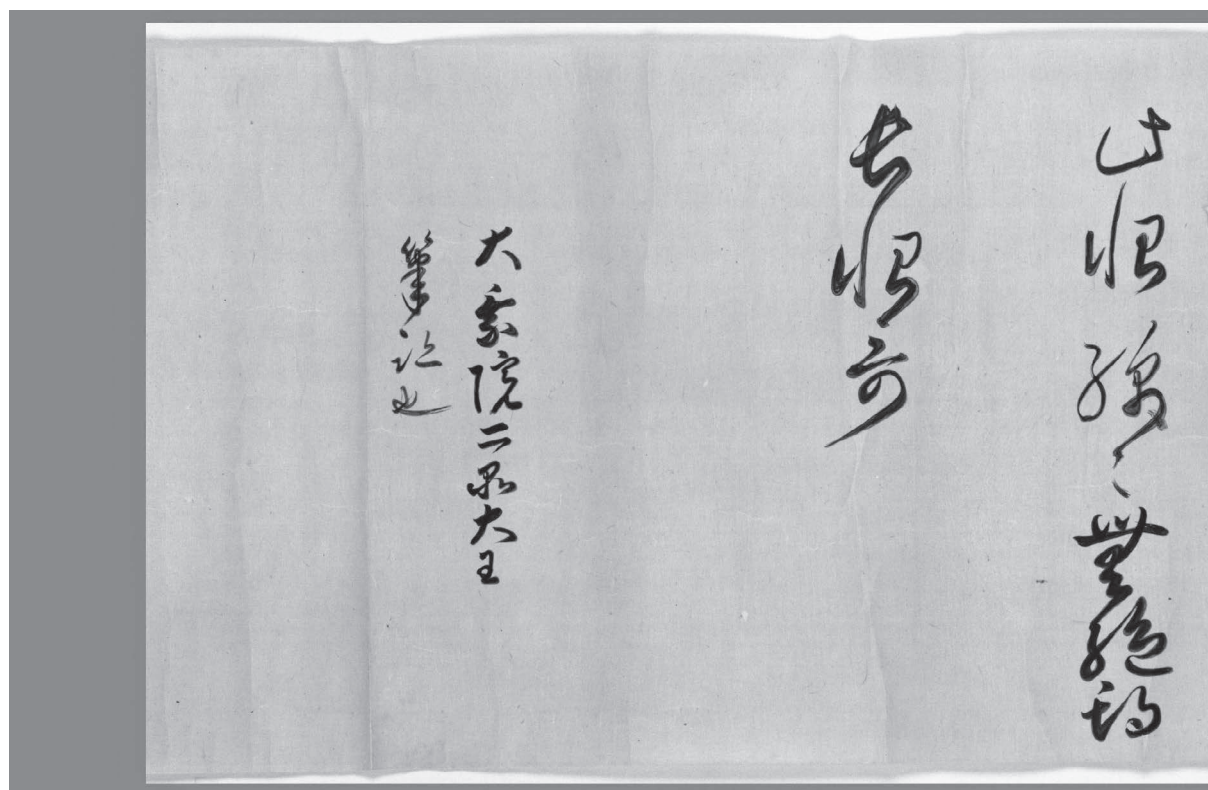
芙蓉 如面 柳如眉
萬計 如 不 淚垂
玉風 桃李 花開 日
秋露 梧桐 葉落 時
西宮 南內 多 秋氣
落葉 滿 階 不 知 收
梨園 弟子 白 髮新
柳房 阿監 青 蛾 死
夕照 螢飛 思 情 悲



之陳功多仙子
中有一人爲玉妃
宮闈靜寂多香氣
金釵兩股叩玉扉
將菱小玉粘黃環
穿屏漫教玉子吹
九華恍若夢魂驚
攬衣推枕起徘徊
珠箔銀屏盡卷開

雲鬢半鬆新睡覺
花冠不整下堂來
風吹仙袂飄飄舉
猶似霓裳羽衣舞
玉容寂寞淚瀾干
梨花一枝春帶雨
含情凝涕謝君王
一別音容兩渺茫
昭陽殿裏恩空歎





聞予出官二年怆然自安感人言
是夕始覺有遷謫意因為長
句歌以贈之凡六百一十二言命曰
琵琶引
尋陽江頭夜送客楓葉荻花
秋索々主人下馬客在舫舉酒欲
飲管絃解不成歡極將別時
茫茫江浸月忽聞水上琵琶聲
主人忘故客不覺尋聲暗問彈
者誰琵琶聲停欲語遲移
船相近邀相見添酒迴燈重圍坐

千呼萬喚始出來猶抱琵琶半
遮面將袖撥絃力三折未成曲
調先有情緒掩抑聲々思似
新平生不得意低眉信手續々
彈欲盡心中無限事惟挑撥
撥抹復挑初為霓裳後綠腰大
弦嘈々如急雨小弦續々似私語嘈々
竊々雜錯彈大珠小珠落玉盤
間關鶯語花底滑幽咽泉流冰
下難冰泉冷澁絃凝絕々名
門拜將歌別有曲悲感悽惻

以時言拜傳之聲 銀符萬
 水邊連織清雲玉刀陰鳴於
 收撥當心處四絲一絳如雲
 東船而船情世之唯見江心
 月白流風收撥插絳中而
 本家就教者自云如是而
 亦正臨書清下位中二學得
 畫成名於畫坊中一節曲所
 友善才伏枵來每夜悔始如
 不復言少年雖以一曲而
 知水調以言為聲之破也

羅襪飄海污之香新發後
 秋月風亦不度中老江寧
 姨兒當言朝來彩衣如門
 落新多稀花大爐他商人
 人多利收難前自江梁買
 茶去之來江口而如也船
 江有主之極深如也少之
 糖波如煙火家之無盡已
 人之口口口口口口口口
 落人如也何也何也何也
 多而希之來也何也何也

